## ラマダ ンにおける 言者

:

明:ラマダ ンにおける 言者ムハンマドの教え。

目: 事詩 行 とその 践践の五ヶ条」とその他の崇 行

より: シャフル ハミ ド教授

**□**10 Mar 2014

集日 27 Mar 2022



私たちの目を、埃っぽい地面から星の く天に向けさせたのはムハンマド(神の慈悲と 祝福あれ)でした。私たちを暗 の暗 から神の光へと きだしたのはムハンマドでした。

言者こそが、私たちに先立って石像や木像の神々を破 した者です。ムハンマドこそが 、 れた偶像崇 の から私たちを救い出し、唯一なる神への信仰を甘美なものとしたので す。

ラマダ ンのみいつの夜に、クルア ンはムハンマドに 示され、ヒラ の洞窟で最初の 々を 受け取ったのです。(イブン アッバ ス)

その、 言者は日中の断食、夜 の礼 によっていかにラマダ ンを祝うかを教えました。ラマダ ンは 日、断食によって忍耐し、礼 によって感 を示すのです。

## 意外な 化

言者によって、粗暴なアラブ人の 部族が、神の きを求めてモスクで一日5回礼 に立つ、 敬虔で 律のある、神を畏れる禁欲者の集 に 革 洗 させられたのは、奇 以外の何でもあり ません。

想像してみてください。「ワインと女たち」の愉しみに じていた同じ人々が、ラマダンの一ヶ月を丸ごと断食と礼 に やすようになったのです。

言者は追者の心のなかに、神へのと怖れ、そして人への情を植え付けました。彼による模は人々を鼓舞し魅了しました。そして彼らの一人一人は言者に最も近い追者になるうと努力したのです。

彼らにとって、 言者は最も 直で な指 者でした。彼の人生は、まるで 物のように彼らの前に げられていました。彼らは、彼が いていたことを彼自らが 践しているのを 近に ることが出来たのです。

# 精神性を究 のものに

言者は人々に し、来世に比べれば 世は取るに足らず、身体は精神よりも重要性の低い ことを教えました。断食において、 言者はいかに精神を超越させ、身体の要求を する かを段 的に教えたのです。

食、性行 を断つことは、さらなる重要性の幕 けに ぎません。それはつまり、 望、 欲さ、情欲、不道 を克服することです。それは人の精神を、激情に振り回されることから 自由にするのです。 に、 言者はこう述べています。

言者によれば、断食の核となるものは、 に 癖を んで断つことだけではなく、同胞の必要性を自分自身のもののように感じることも含まれます。神の使徒よりも 大な心を持

つ者はいませんでしたし、彼の 切さはラマダ ン月に に したのです(サヒ フ ブハ リ )。

言者は、人々に良く振舞うことをしてこう述べています。

また、彼はこのようにも述べています。

真 に断食する者の心は、神による数えきれない程の恩 の 大さを熟考することに して常 に かれています。 言者ムハンマドが、その追 者たちに して暴 暴食を避けるよう求めた のそのためです。

#### 困 における しさ

神は最も慈悲深き御方であり、かれはそのご慈悲をその被造物に し、最 の使徒ムハンマドを遣わすことによって具 化しました。 言者はこう述べています。

言者の教友たちが、彼をこよなく していたのは、彼が最も 切な人物であり、人 だけでなく 物たちにも慈悲を示していたからです。

ムハンマドよりも、その追者たちにする思いやりにち、心配りの行き届いた指者はいません。彼はいかなるムスリムにしても、神によって教えられた通りに、彼らが耐え忍ぶことの出来ない程の担をすことはありませんでした。

彼は人々の弱さについて熟知していました。そしてそのことは、断食において彼が追者たちに して せた心配りによって明白です。彼はムスリムたちがサフ ル (夜明け前にる、断食前の食事)を夜明け前の礼 の少し前まで らせ、イフタ ル (断食明けの食事)を日没の礼 の まで らせないよう教えたのです。それは、断食の が延びることにより、不要な 担がかからないようにするためです。

ラマダ ン中に旅をした 、 言者は断食を 行ことも、断食を延期したこともありました。 そして彼は教友たちの能力や状 に じて、どちらか好きな方を ぶことを したのです。

言者が断食をせずに む旅路の最低距 を明言しなかったことは、特 に することでしょう。彼の教友たちは、 言者自身によってそうされたように、 には家を出てすぐに断食を 解きました。

同 に、酷暑のときや身体の きにおいて、 言者がそうしたように に水をかぶることが 可されています。

ラマダ ン中における妻との触れ合いにおいては、ラマダ ン中も通常 と わりませんでした。彼が禁じたのは、明らかに断食を にする行 (性的行 )だけでした。

タラ フィ フ礼 (ラマダ ン中の夜 に行われる任意礼 )に しては、当 それが合同で行われることが となりつつありましたが、 言者はそれを けることによって 化されてしまうの を怖れ、中断したということが されています。

それゆえ、タラ フィ フ礼 が合同で行われることがより良いという模 を示しながらも、 その慈悲から任意のままであることを したのです。

## 遁: 魂の し

ムスリムにとって、ラマダ ンの最 の10日 に、ライラトル=カドル(所 、みいつの夜) を探し求めることが、その最高潮となります。この期 において、 言者が した行 の一つ としてイァティカ フがあります。それは、モスクに って神への想念と崇 にすべての を 捧げる、精神的な 遁行 です。

代社会において、人々ははかない快 にふけりがちであるため、 には崇 の家に ることも 重要です。それは魂の しのため、そして自らの 造主に立ち返るためには必要不可欠な のです。

それゆえ、敬 すべき 言者は私たちに、 固な欲求に する として、また自己 足のための欲望を放 するため、また苦 との直面における忍耐と辛抱の 践のためにラマダ ンを有 に ごす方法を教えたのです。

言者はラマダ ン中、特に まれない人々に手助けをすることは私たちの任 であるとして 、それを く めました。

そして何よりも、ラマダンは全能なる神の大さと恩について熟考し、守者としての主のご慈悲を求めて真に悔悟しつつ、かれに立ち返る月なのです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/1708

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。